

博物館だより

No.212

令和6年7月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行 福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13 TEL 0930-33-4666 FAX 0930-33-4667

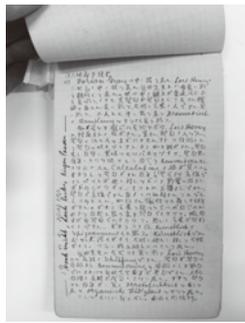
博物館休館日カレンダー 2024年7月

Calendar table for July 2024 with days of the week and dates.

休館日 ※情報はR6.6.21現在

◆博物館「イチオシ」逸品レポート この展示（&収蔵資料）「ココが見どころ、ココがツボ!!」

今年「みやこの先人」の一人、小宮豊隆の生誕140年の記念年です。夏目漱石作品「三四郎」のモデルにして漱石研究の大家とされる小宮ですが、漱石という稀代の文豪の輝きが強烈すぎて、残念ながら彼自身のことあまりよく知られていません。この記念の年、「知の巨人」ともいふべき教養の人・小宮豊隆を当館注目の資料から調べてみませんか？

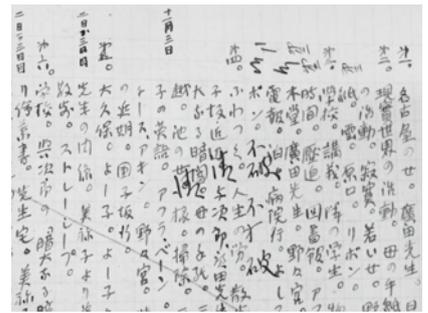


▲研究ノート兼ねた小宮の携行手帳 手帳には考察がびっしり書き込まれる

●資料解説「三四郎」自作の作品研究ノート

小宮は明治42（一九〇九）年に東京帝大を卒業、大学講師などをしながら漱石の下への出入りを続けま

ある意味、ぼつと出の若者が、当時の文壇を牛耳るような存在になったのですから、周囲も本人も鼻高々になるようなこともあったようです。そんな時期に記されていたのがこの手帳で、当時の文壇の名士たちを○や×で評価しており、文壇の総

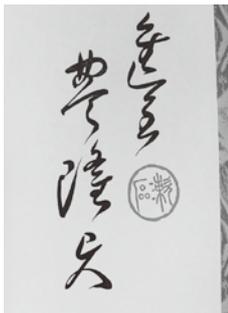


▲手帳の記事のうち「三四郎」の分析を記す箇所 物語の段落ごとに日時と話題の推移を書き上げている

●資料名

- 小宮豊隆資料（第二次寄贈）一括のうち
①小宮豊隆所用携行手帳
②漱石惠存署名入り「三四郎」初版本
データファイル
法量等...①1冊②1冊(菊版本)
制作年代...明治42〜44(一九〇九〜一十二年)
ポイント...「三四郎」刊行後にモデルの小宮が記した評論・分析
公開状況...整理中のため通常非公開

帥のような気分だったことが窺えます。ただ、評価を下す立場だけに、対象の作品はそれなりに読み込みと研究をしており、その辺は単なる「のぼせもん」ではなかったようです。面白いのは単行本化されたばかりの「三四郎」を自ら評論していることで、中々緻密な論陣を張ってはいませんが、やがてこれらのことが漱石から大きな失望を買うこととなります。



▲漱石の惠存署名入り「三四郎」初版本(春陽堂刊)明治42年5月に刊行

◆講座・教室・催し物ガイド 7月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】 7月6日(土) 9時30分〜
【古文書講座】 7月13日(土) 10時〜
【古典かな講座】 7月20日(土) 9時30分〜
【みやこ学講座】 7月27日(土) 10時〜
※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

令和6年度「わたしのお気に入り」ふるさと遺産」 絵画・作文コンクール作品募集!

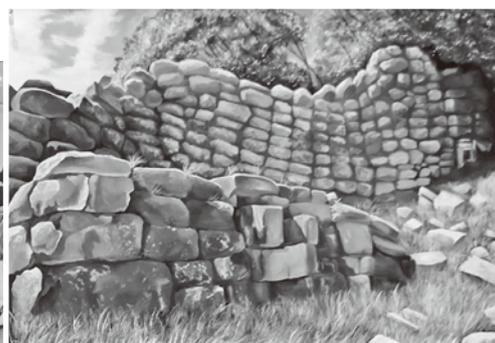
博物館では町内の小中学生を対象に「わたしのお気に入り」ふるさと遺産(ふるさと遺産)の自然と文化・歴史に育まれた景色や遺跡・伝統行事など)の絵画・作文コンクールを開催します。

これまで「わたしの町の過去・現在・未来絵画」「歴史たんけん作文」コンクールの名で作品募集してきましたが、今年からコンクール名称を統一すると共に、作文については①作品募集学年を小5から中3までに拡大②作品の募集テーマを設けるなど、募集スタイルを一部変更して実施します。詳細は各学校へ配布される募集チラシや博物館のHPを御覧頂くか、博物館宛直接お問い合わせ下さい。

この夏は、楽しい思い出作りとともに記念に残る作品作りませんか？



作文コンクールにおける最優秀作品受賞者の表彰の様子(歴史民俗博物館研修室にて)▼



▲令和5年度の絵画コンクールで最優秀となった作品「古代の山城 御所ヶ谷神籠石」

5月の業務日誌から



5月10日(金)、みやこ町文化財保護委員会(藤本孝彦委員長)から教育長あて新規の町文化財指定に係る答申書が手渡されました。対象は小宮豊隆旧居跡(史跡)で、町の宝がまた1件増える見通しとなりました。

みやこの歴史発見伝 168
紫式部とみやこ町 ②

藤原道長の「タイムカプセル」

紫式部が源氏物語を執筆した平安時代の中期、お釈迦様の死後、1000年が経つと仏教の信仰が廃れる「末法」の世となり、やがて終末を迎えるという思想がありました。紫式部の夫、宣孝が亡くなり、源氏物語の執筆を開始した長保3年(1001)から51年後の永承7年(1052)がこの末法の始まりの年とされ、深刻な事態として当時の人々に不安や恐怖が広がりました。「この世の終り」を迎える対策として、当時の貴族や僧侶は、仏教の教えを未来に伝えるため経典を地中深くに埋めた「経塚」を築きました。紫式部と親交があり、源氏物語の主人公のモデルの一人とされている、当時の最高権力者、藤原道長が末法に先立つ形で、寛弘4年(1007)に金を施した銅製の容器に経典を入れて奈良県の金峯山に埋めたことが国内初の事例に位置付けられています。これ以降、当時の政治・文化の中心地であった畿内の貴族や僧侶を中心にこの「埋経文化」が流行します。

当時、国内で造営された経塚の分布をみると、近畿とみやこ町を含む北部九州に集中している傾向がみられます。様々な研究の結果、この背景には藤原道長と宇佐八幡宮がその造営に関わり、さらにみやこ町ゆかりの人物がその両者の結びつきを深めたことに起因することが確認できました。今回は紫式部の源氏物語執筆に大きな影響を与えた藤原道長から信頼を得て、八幡宮の頂点に上り詰めた

みやこ町ゆかりの人物をご紹介します。

下田経塚について

京都郡と田川郡を結ぶ仲哀トネル入口に位置する勝山松田の「菩提」集落には、その地名が示すように奈良〜平安時代の宗教関連の遺跡が多数確認されています。8世紀後半頃には菩提庵寺跡(県指定史跡)が創建され、この寺院を中心に、「菩提四九院」とよばれる多数の仏教関連施設が存在が伝えられています。この菩提庵寺跡から北に約500m離れた下田集落付近の山中から約50年前、銅製の筒が2本出土しています。2本のうち1本の中から和紙の塊が発見され、お経を記した和紙をロール状に巻いた経典であることが確認されたことから、平安時代の経筒であることが確認されました。もう一方の経筒は宋(中国)で製作された壺が被せられた形で発見され、この経筒表面には56文字の漢字が刻まれていました。判決の結果、今から897年前の大治2年(1127)9月19日に経爵、隆範という僧侶によつてこの経筒の埋納が計画され、宗形氏という女性のスポンサーによつて法華経が埋納されたことが確認でき、埋経の年代や経緯の詳細が確認できる希



下田経塚出土品 (みやこ町指定文化財)

少な事例となりました。また菩提四九院のつと伝えられる「宝積寺」には木造の菩薩像が伝えられています。像高71cmを測るこの菩薩像は、衣の彫り込みなどの外観の特徴から紫式部が活躍した平安時代に製作されたものとみられています。現在までみやこ町内で確認されている仏像としては最古に位置付けられ、県内でも数少ない平安時代にさかのぼる仏像として注目されています。現在、「下田経塚出土品」及び宝積寺の「木造菩薩立像」は、町の文化財に指定されています。

壺が物語る中国、宇佐との関係

藤原道長は、紫式部の父、藤原為時を越前国(現在の福井県)の国司に任命し、為時と紫式部は長徳2年(996)の秋に越前国へ向います。当時、日本は66の国に分かれ、各々の国は4等級にランク付けされていました。

この中でも、越前国は最上格にあたる「大国」に位置付けられ、平安京に近く生産力も高かったため、赴任先としてはとても人気が高い国でした。為時が任命されたのは、前年の長徳元年(995)9月に宋(中国)から渡来した70人近くの中国人の対応策として、為時が漢文の能力に秀でた適任者であったことがその理由とみられています。因みにみやこ町が位置する当時の豊前国は2番目にあたる「上国」に位置付けられています。

下田経塚では、12世紀頃に宋(中国)の華南周辺で製作されたと考えられる壺が被せられた形で発見されていますが、近年、この壺と全く同じ形、大きさの壺が、宇佐市の経塚で発見されています。これらの壺は紫式部や父、為時が対応したように、宋の商人などから宇佐を介して、みやこ町の埋経に用いられたものと推察

されています。

宣孝と元命

光源氏のモデルの一人である藤原道長は豊前国(現在の北九州市から大分県宇佐市にわたる行政範囲)の一宮である宇佐八幡宮と深く関わった人物としても知られています。道長は、宇佐八幡宮の祭神「八幡神」を「護国神」に位置付け、宇佐八幡宮境内に設けられた寺院「弥勒寺」を「護国寺」として、彼が理想とする国家体制の中でも特に重要な寺院に位置付けています。当時の宇佐八幡宮西側には、藤原道長及びその関係者によつて建立された多くの壮麗な建物が確認できますが、これらの建設に際して現地で指揮を執つたのが「元命」という人物です。古記録によると、この元命の父親は豊前国分寺(みやこ町国分)の講師(寺家の長官)で祖父は豊前国府(みやこ町国作)の国司(現在の都道府県知事に該当する役職)の三等官を務めたことが確認できることから、彼自身もみやこ町豊津周辺出身の人物ではないかと推察されています。

紫式部と夫、宣孝に娘の賢子が誕生した長保元年(999)に元命は宇佐八幡宮弥勒寺の講師に就任しますが、この年の11月に紫式部の夫、宣孝は「宇佐奉幣使」に任命され宇佐に派遣されています。元命は、道長の手足となつて宇佐で活躍したことから道長から絶大な信頼を得ることになります。治安3年(1023)には、道長の人事により、当時の都であった平安京の南西側を守る重要な神社として建立された石清水八幡宮(京都市)の別当(長官)に任命されています。さらに、宇佐八幡宮の大莊園領主(貴族や寺院、神社などが国

から領有を認められ経済基盤となった農地や山林などの領主)の頂点に立つなど異例の出世を遂げます。現在、国内にある約44,000社の八幡宮の総本宮は、宇佐八幡宮(宇佐市)で、石清水八幡宮(京都市)、宮崎宮(福岡市)と併せ、「日本三大八幡宮」と称されています。また当時の宇佐八幡宮は九州各地に数多くの所領を有していたことから、元命が宇佐八幡宮と石清水八幡宮の重要な役職に就任した背景に道長の信頼の高さを垣間見ることが出来ます。また各種文書や地名から下田経塚や菩提庵寺が位置する勝山松田周辺には「菩提院」、国内で唯一、経筒製作に伴う鋳型が出土したみやこ町犀川山鹿周辺には「護得庄」とよばれる宇佐八幡宮弥勒寺の莊園があったことが確認できます。このように宇佐八幡宮弥勒寺を介して、経筒の製作や中国製陶器の入手等が行われたものとみられています。畿内で藤原道長から始まった「埋経」という「みやこの文化」が元命などを介して、みやこ町を含む北部九州一帯にもたらされたものと推察されています。

元命は永承6年(1051)に亡くなりますが、元命の息子も石清水八幡宮別当や弥勒寺講師、東大寺別当などを務め、娘も大宰府天満宮に嫁ぐなど、彼の死後も、その子孫が北部九州の主要な神社や寺院で強い権限をもつことになりました。宣孝を「宇佐奉幣使」、元命を宇佐八幡宮弥勒寺の講師に就任させるなど、道長が信頼する人物を宇佐に派遣、就任させていることは、道長が「豊前」をいかに重要視していたかを伺うことができます。また紫式部の夫とみやこ町ゆかりの元命が、共に道長の命によつて宇佐に深く関わっていたことは非常に興味深いものです。(井上信隆)